

地方だより

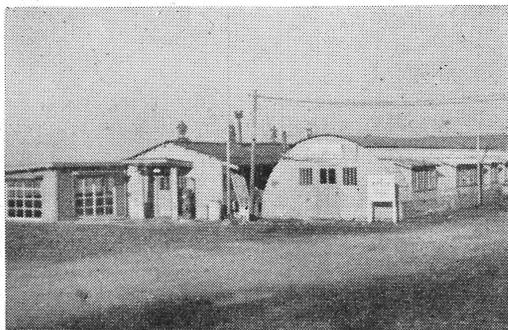
板付航空測候所

板付は福岡市の南東方に位置し博多駅からバスで僅か15分のところにある。昭和19年、当時、陸軍の手で学徒の勤労働員を主に、時には米軍の捕虜までも使い、急ぎ整備されたものである。席田飛行場、ここはただ特攻基地として、あるいは震電のデビュー地として、その名を航空戦史にしろされたに過ぎなかった。終戦後、米軍の占領とともに名も板付飛行場と改められ、極東作戦基地として、新しくクローズアップされ、その名は朝鮮事変を契機として世間に知られるようになった。

ここには、いま第43航空師団師令部があり、第8戦闘爆撃隊が駐留している。この隊は板付から半径100マイルの空域を防衛範囲にして、アラルトハンガーにはF86Dが完全武装し、指令一下3分以内に飛び立つ態勢で常時待機している。滑走路9,000フィートを有し日本有数の理想的飛行場で、なお基地では1,000フィートの滑走路延長工事を実施しているが、接收地内であるため、他基地にみられるような基地拡張の反対運動はない。しかし滑走路が南北に走り、その延長上が福岡市内となり九州大学などの学園が、ちょうどその真下となるため、ジェット機特有の爆音はものすごく、教室内での騒音も、平均90フォンを越えるありさまで、学校ではこの「地獄の音」に悩まされ授業もろくろくできない状態との事である。

このため「基地移転促進運動」を進め、この飛行場を純民間航空の国際港に実現して、羽田につぐ西の玄関口として、大福岡の建設をめざして、運動が起されている。なおこの基地には装甲車をもったゲリラ迎撃隊の特別憲兵中隊がある。これなど現在日本の縮図といえよう。

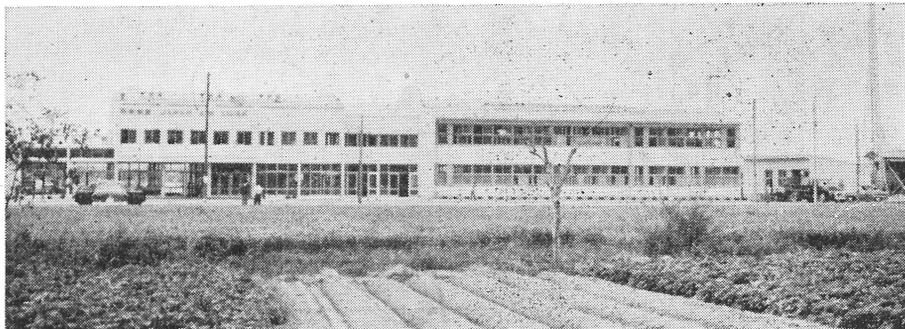
羽田とちがい、ジェット戦闘機の絶えまない騒音は実際に経験したものでないとわからない。このような特殊の環境下において、日航、極東航空の定期便が一部を借用



写真A 発足した当時の旧ターミナル

して、それぞれの基地としているありさまである。昭和26年10月日航の就航とともに写真Aにみられるとおりのかまほこ兵舎の内部を改造して、福岡市の空の玄関口として発足したが、それも米軍の基地内であり、借用の期限が昭和30年で切れたので、日航に対し、芦屋へ立退きの命令がだされ、一時は険悪な状態となり、市民の猛反対運動などで、これはとりやめとなつたいきさつもあった。そのうち福岡一沖縄線開始の話がおり、在来のところでは、CIQの業務はほとんどできないとのことで約2,000坪の土地を基地内に提供してもらいたいとの交渉が、現地、中央で強力に進められた結果、今回ようやく基地内の一隅1,000坪が返還され、移転をみるに至った。この土地に建坪300坪の木造モルタル塗2階建のターミナルビルが31年8月31日完成した。

ここは現在日航の福岡—東京3往復、福岡—沖縄週2往復、それは極東航空の福岡—大阪1往復、福岡—宮崎1往復が運航されている。この定期便に対し、明けくれジェット機の「地獄の音」に神経を驚かされながら、我々は毎日、気象のサービス業務をつづけている。今日もまた、タクシーパーキングには観光バスが何台も列をくんでならび、内からは大勢の子供や大人達が吐きだされ、グロブマスターの巨大さや、ジェット機の離着陸にみとれている。この飛行場が完全に日本の管理となり、南方諸国および隣国中共との間に、旅客機の自由に飛び交う日は、果していつの事であろうか。 昭31.10.10.



写真B 新庁舎のあるターミナルビル